

## 近代日本における軍歌「抜刀隊」の役割と各種メディアの動きについて

時計ばかりがコチコチと 動いてゐるも情けなや

九 思へば去年船出して お国が見えずなつた時  
玄海灘に手を握り 名を名乗つたが始めにて

十 それより後は一本の 煙草も二人わけてのみ  
ついた手紙も見せ合て 身の上ばなしくり返し

十一 肩をだいては口ぐせに どうせ命は無いのよ  
死んだら骨をたのむぞと 言ひかはしたる二人仲

十二 思ひも寄らぬ我一人 不思議に命ながらへて  
赤い夕日の満州に 友の塚穴掘らうとは

十三 くまなくはれた月今宵 心しみじみ筆とつて  
友の最後をこまごまと 親御へ送る此手紙

十四 筆の運びはつたないが 行燈のかけで親達の  
読まるゝ心思ひやり 思はずおとす一雫

(佐々木正昭、一九八九年『真下飛泉とその時代』春陽堂、一一〇～  
一二四より)

我身のなせる罪業を 滅す為にあらずして  
 賊を征伐するが為 剣の山もなんのその  
 敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
 玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

## 四

剣の光ひらめくハ 雲間に見ゆる稲妻か  
 四方に打出す砲声ハ 天に轟く雷か  
 敵の刃に伏す者や 丸に砕けて玉の緒の  
 絶えて墓なく失する身の 屍ハ積みて山をなし  
 其血ハ流れて川をなす 死地に入るのも君が為  
 敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
 玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

## 五

弾丸雨飛の間にも 二ツなき身を惜まずに  
 進む我身ハ野嵐に 吹かれて消ゆる白露の  
 墓なき最後とぐるとも 忠義の為に死ぬる身の  
 死て甲斐あるものならバ 死ぬるも更に怨なし  
 我と思ハん人たちハ 一步も後へ引くなかれ  
 敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
 玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

## 六

我今茲に死ん身ハ 君の為なり国の為  
 捨つべきものハ命なり 仮令ひ屍は朽ちぬとも  
 忠義の為に捨る身の 名ハ芳しく後の世に  
 永く伝えて残るらん 武士と生れた甲斐もなく  
 義もなき犬と云ハるるな 卑怯者となそしられそ  
 敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
 玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

〔齋藤桂、二〇〇七年「軍歌《抜刀隊》に見る明治初期の価値観」〕  
 『大阪音楽学報』五、一〜一四、大阪大学〔付録〕より〕

## 資料二

真下飛泉「战友」歌詞

- 一 ここはお国を何百里 離れてとほき満州の  
赤い夕日にてらされて 友は野末の石の下
- 二 思へばかなし昨日まで 真先かけて突進し  
敵を散々懲らしたる 勇士はこゝに眠れるか
- 三 ああ戦の最中に 隣にをつた此友の  
俄かにハタと倒れしを 我は思はず駆け寄つて
- 四 軍律さびしい中なれど 是が見捨て、置かれうか  
「しつかりせよ」と抱起こし 仮纏帯を弾丸の中
- 五 折から起る突貫に 友はやうやう顔上げて  
「お国の為だ関はずに 後れて呉な」目に涙
- 六 あとに心は残れども 残しちやならぬ此身体  
「それじゃ行くよ」と別れたが 長の別れとなつたのか
- 七 戦すんで日が暮れて さがしにもどる心では  
どうぞ生きてゐて呉れよ 物なと言へよと願ふたに
- 八 空しく冷えて魂は 故郷へ帰つたポケットに

## 近代日本における軍歌「抜刀隊」の役割と各種メディアの動きについて

- 集成 第三巻) ゆまに書房
- ・坂本多加雄、一九九九年『明治国家の建設 一八七二～一八九〇』(日本の近代 二) 中央公論社
  - ・佐藤愛、二〇〇〇年『俗謡・西郷伝説・日清戦争―泉鏡花「予備兵」覚え書―』
  - ・『芸術至上主義文芸』二六、一五～二五、芸術至上主義文芸学会事務局
  - ・浅川道夫、二〇〇一年『日本陸軍にみる白兵戦思想の変遷』
  - ・『陸戦研究』五七五、二二～五二、陸戦学会
  - ・清水瑞久、二〇〇三年『外山正一にみるメディアと芸術―透明化されるメディアと国民の創生』『マス・コミュニケーション研究』六三、一三〇～一四三、学文社、日本マス・コミュニケーション学会
  - ・斉藤利彦・倉田喜弘・谷川恵一校注、二〇〇六年『教科書 啓蒙文集』(新日本古典文学大系 明治編 十一) 岩波書店
  - ・小川原正道、二〇〇七年『西南戦争』(中公新書一九二七) 中央公論社
  - ・齋藤桂、二〇〇七年『軍歌《抜刀隊》に見る明治初期の価値観』
  - ・『大阪音楽学報』五、一～一四、大阪大学
  - ・中山エイ子、二〇〇七年『初期の軍歌と楠公の歌について』
  - ・『日本学研究』一〇、一三七～一八九、金沢工業大学日本学研究所
  - ・高野信治、二〇〇八年『士族反乱』の語り―近代国家と郷土の中の「武士」像
  - ・『九州史学』一四九、三六～五三、九州史学研究会
  - ・生住昌大、二〇〇九年『報道と実録の間―「士族反乱」を語る枠組み―』
  - ・『近代文学論集』三五、一～一二、日本近代文学会九州支部
  - ・尼ヶ崎彬、二〇一一年『近代詩の誕生―軍歌と恋歌』大修館書店
  - ・小村公次二〇一一年『徹底検証・日本の軍歌―戦争の時代と音楽』学習の友社
  - ・齋藤桂、二〇一三年『裏・近代日本音楽史(一) 近代に彷徨う武士の怨霊・軍歌「抜刀隊」と西郷星』『春秋』五五〇、二四～二七、春秋社
  - ・生住昌大、二〇一四年『西南戦争と錦絵―報道言説の展開と明治一〇

年代の出版界―』

『日本近代文学』九〇、一～一六、日本近代文学会

・岩切友里子編、二〇一四年『芳年』平凡社

・辻田真佐憲、二〇一四年『日本の軍歌 国民的音楽の歴史』幻冬舎

## 資料一

## 「抜刀隊」歌詞

- 一 我ハ官軍我敵ハ 天地容れざる朝敵ぞ  
敵の大將たる者ハ 古今無双の英雄ぞ  
之に従ふ兵ハ 共に剽悍決死の士  
鬼神に恥ぬ勇あるも 天の許さぬ叛逆を  
起しし者ハ昔より 榮えし例あらざるぞ  
敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし
- 二 皇国の風と武士の 其身を護る靈の  
維新このかた廢れたる 日本刀の今更に  
又世に出づる身の誉 敵も味方も諸共に  
刃の下に死ぬべきぞ 大和魂ある者の  
死ぬべき時ハ今なるぞ 人に後れて恥かくな  
敵の亡ぶる夫迄ハ 進めや進め諸共に  
玉ちる剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし
- 三 前を望めバ剣なり 右も左りも皆剣  
劍の山に登らんハ 未来の事と聞きつるに  
此世に於てまのあたり 劍の山に登るのも

うな、抽象と具体の間にある日本の可視的・地形的な国土を指すものと小関は捉え、ここでの「お国」国土への視線は、生まれた土地の山河の像へも遠く連なっていくと推定している。軍歌「戦友」は、「故郷・帝国日本・日本の国土（郷里の風土）」という三つ（あるいは四つ）の要素を、微妙なバランスで混在させたテキストであると小関は述べている。（前掲・四〇～四一）

国民に愛唱された「戦友」であったが、この軍歌はしばしば意気消沈、軍規違反として禁じられたこともあった。（園部・一九八〇・朝日新聞社）小関は、「故郷」への視線はそれ自体としては危険ではないと捉えているが、一人ひとりが自らの「故郷」へ心的に同化・固着するとき、国家「お国」のためという論理を凌駕する可能性を示している。封建的な遺制を残したままの近代化を選んだ日本は、愛郷心を一方では鼓舞しつつ、もう一方では制御しながら、それを「愛国心」へと再組織する道を辿っていたのである。（小関・一九九八・四二）

さらに小関は、「戦友」が歌い継がれた背景に、歌詞の中身とは別の、様々な社会的条件の変化があったと考えている。日露戦争中は、「国家」と「国民」との関係の実質的なありようが変化し、それは第二次世界大戦の終結まで続いていく。小関はその端的なものとして、日露戦争中に変えられた徴兵制度、特に陸軍の「後備役」が五年から十年に延長されたことによる、「国民」生活への影響を挙げている。日露開戦後の日本側の損害は甚大で、後備兵までもが不足する事態に陥ったことにより、明治三十七年九月、後備役の延長を含む徴兵令の改正が行われた。一家を支える年齢の壮年男子が、後備役からやがて戦地へと投入され、百万人もの「国民」が集められた結果、戦争の影はそれまで以上に広く「国民」の上に覆いかぶさることとなった。小関は、日清戦争を上回る兵力動員数と、八万人以上の死者は、人々に「国民」としての死を否応なく意識させることになったと述べている。（前掲・四二）

## おわりに

本論文では、新国家建設過程の日本において、人々に新しい「国民」としての意識を持たせ、統合するための様々な動きについて研究を行ってきた。新しい思想を普及させる動きの一方で、前時代的な価値観や「クニ」の概念が根強かったこともまた事実である。第三章で取り上げた武士的な価値観などは、むしろ江戸時代よりも強調されていたように捉えられるのではないだろうか。

軍歌といえば戦争の際に歌われ、兵士の士気を鼓舞する音楽というイメージが強いが、今回の研究で取り上げた曲のように、決してそうしたイメージだけに留まっていたのではないだろう。新国家の建設においては、ただ勇壮な曲を作って広めるだけではなく、戦争に直接参加しない人々の心にも影響を及ぼさねばならなかった。そうでなければ、理念上の「国民皆兵」や「国民統合」などは、実現することがなかったと考えられる。

## 参考文献

- ・生方敏郎、一九七八年『明治大正見聞史』中央公論社
- ・園部三郎、一九八〇年『日本民衆歌謡史考』朝日新聞社
- ・国史大辞典編集委員会、一九八五年『国史大辞典』第六卷、吉川弘文館
- ・山本昴、一九八五年「近代詩人の戦死観…第一次世界大戦までの英詩と日本詩から」『金城学院大学論集 英米文学編』二二六、一四七～一七〇 金城学院大学
- ・畠中智耕、一九八七年『激闘田原坂秘録』肥後評論社
- ・参謀本部陸軍部「田原坂戦記」巻八（『征西戦記稿』上巻）青潮社、一九八七年
- ・佐々木正昭、一九八九年『真下飛泉とその時代』日本図書センター
- ・山本武利・有山輝雄監修、一九九九年『新聞記者論Ⅰ』（新聞史資料

佐藤は続いて、泉鏡花の「予備兵」（明治二十七年）の中にも、夜空に日清戦争の出征の日取りを占う庶民が描かれていることを取り上げている。ここでは、「天下の騷乱」を知らせるといふ不吉な「彗星」の風説を信じる者と、出師を知らせる「旗星」であるとする者の議論が描かれている。「彗星」であると信じる者は、ここで西郷星の事例を持ち出して「乱世」説を主張している。佐藤はこの内容から、西郷星の噂がその発生から十年以上を経て消滅していなかったことを、この作品が伝えていると指摘する。（前掲・一六〇―一七）

泉鏡花の「予備兵」は、日清戦争時を主な時間軸として展開し、開戦に傾きつつある時勢に「沈鬱」な表情を見せる医学生・風間清澄が、愛国心に燃える養母とその取り巻きに「破廉恥」「無気力」と罵られる前半と、養家を追われ徴兵に応じた清澄が、行軍中に日射病に倒れ、剣を放さず少尉として死んでゆく姿を描く後半とで成り立つ物語である。そして、この物語の中には、様々に形を変えた西南戦争の記憶が散りばめられていると佐藤は述べている。（前掲・一七）

「予備兵」の中の西南戦争の記憶の一つとして佐藤は、主人公・清澄を「非国民的」となじり、「天誅」も持さない一団「蜻蛉組」の定義を示す言葉を挙げている。この言葉の中には「抜刀隊」という語が登場しており、軍歌「抜刀隊」を連想させる。また、戦争に熱狂する「抜刀隊」に対し、清澄が冷やかな態度を取った際には、「堪えかねて躍立ちたる一漢子」が「天地もこれを容れざる」などと罵言を浴びせる場面があり、これは「抜刀隊」そのままの表現となっている。清澄は戦争に逸る「壮士」たちとは対照的な態度で時勢に向かい合っていたため、彼らから幾度も罵倒される。「壮士」とは元来、自由民権運動の活動家を指す語であったが、その多くは明治維新で禄を失った士族であった。彼らは日清戦争に再起の機会を見出し、「清」に「敵愾心」をあらわしていたのである。さらに、清澄が罵倒される際には必ず「国民」の語が持ち出されており、日本における「国民」の概念は、軍によって認知させられたということが、この物語にはあらわれている。（前掲・一七―二〇）

また、「予備兵」においては、清澄が清国に対して敵愾心をあらわす描写は一度もない。彼にとつての敵は旧士族の人々で、「旧士族」の「壮士」と、「土百姓」の「軍人」という設定に、士族嫌いであった作者・泉鏡花の、軍隊に対する理解があらわれていると佐藤は述べている。軍隊を形成した徴兵制の狙いのひとつは、不平士族の復活を抑えることであつたとした上で、鏡花にとつて「国民皆兵」の軍隊とは、士族の特権性を否定する絶好の根拠であつたと佐藤は推定している。清澄が日射病に倒れながら、軍刀を死んでも手放そうとしない末期も、廢刀令で刀を失った士族の代わりに、軍刀を賜った「軍人」の誇りや、「国民の義務」を体現するものであつたと佐藤は述べている。（前掲・二二―二二）

## 第二節 日露戦争と軍歌「戦友」

本節では、引き続き対外戦争期の「国民」観念を考察するために、第三章でも取り上げた軍歌「戦友」について、より深く掘り下げていきたい。

真下飛泉作詞の「戦友」は、日露戦争終結後の明治三十八年九月十二日、『学校及家庭用言文一致叙事唱歌第三編』として出版された。これは、『第一編 出征』『第二編 露営』に続き、主人公「武雄」の出征から戦傷、論功行賞、村長就任までを描いた全十二編の一部である。歌詞の内容は、日本軍だけでも七万人もの死傷者を出した奉天会戦で負傷し、帰郷した福田直吉（飛泉の妻の義兄）の体験談を基にしており、彼が飛泉に語ったそのままとされている。（小関・一九九八・四〇）

第三章でも取り上げたように、この歌詞の中では「お国」という語が繰り返し使用されており、小関和弘はこれを、観念としての「帝国日本」を指すものとして捉えている。小関は、友の墓所となつた「満州」の「ここ」＝「野末の石の下」への視線が、出征していなければ「友」の永眠の地となつたであろう故郷の土を意識して生まれたと考えれば、「お国」の語は故郷の像に繋がっていると推定し、また、「何百里」と曖昧化された修辭は後に、様々な「故郷」を持つ大衆の、この歌への感情移入を容易にさせたと推定している。五番の歌詞の「お国」のように、「戦友」においても「国民国家」は意識されていたが、九番の「思えば去年船出して／お国が見えずなつた時」の「お国」は、「故郷の地」とも言うよう

思の統一のためにも、日清戦争ほどの好機はなかったとされる。(生方・一九七八・三九〇四〇) 齋藤によれば、近代日本初の対外戦争に際し、日本を「国」単位で意識するためには、「抜刀隊」で描かれた「内戦」を、国内で清算しておく必要があった。さらに、西郷は明治二十二年の憲法発布に際し、恩赦によって「賊」としての扱いを解かれていたのである。そして、対外戦争という状況下で、第四節で述べた武士的な価値観が国内に浸透し、「抜刀隊」がそうした価値観を、近代国家の中に位置づける役目を果たし終えたと述べている。(齋藤・二〇〇七・一一)

ここで、対外戦争を経た後の軍歌についても触れてみたい。真下飛泉が日露戦争後に作詞した「戦友」の中では、「お国」という語が繰り返して使われており、小関和弘はこれを観念としての「帝国日本」が最初に呼び込まれたものと推定している。しかし、続いて「何百里 離れて遠き」と、移動の経験と距離の感覚とが呼び起こされるとき、これは兵士自身の生まれ育った「故郷」を指していると考えるのが自然となる。(小関・一九九八・四〇)

「戦友」以前の軍歌にも「国」や「御国」、「皇国」といった表現は使用されており、小関は、そこにあるのは天皇制国家の意味で使われた「国」であり、擬制的に編成された「国民」が帰属意識を持つべき対象とされた「国民国家」を指すものとしている。これに対して「戦友」は、それらの軍歌における「国家」主義の系譜に、「故郷」のモニュメントを対置させた歌詞であったと推定している。五番の歌詞には「お国のためだ 関はずに」「後れてくれるな」といった表現が見られ、先述したようにこの「お国」とは、兵士を戦場へと駆り出し、死地に向かわせた「帝国日本」を指している。小関によれば、この歌詞の中には近代になって作り出されてきた「国民国家」意識の表れを見ることができ、明治維新後三十数年間の日本では、このように言い遣す一兵卒が登場するべく、軍隊・工場 学校を軸に「国民」の意識を編成してきたと述べている。(前掲・四一) 真下飛泉の「戦友」については、次の章でより具体的に取り上げていく。

本章では、江戸時代的な帰属意識を持った人々を、新しい価値観の下で「国民」として統合していく過程について取り上げてきた。それは対

外戦争を想定しての動きであり、日清戦争の勃発に至って「国民国家」としての日本は一応の完成を見たと言える。しかし、第四節で述べた武士的な価値観の尊重や、「戦友」に見られる「故郷」の意識など、前時代的な考え方の全てが否定されなかった動きの背景には、維新後も明治政府に不平を抱く人々に対する配慮があったことだろう。外山正一が人民の「籠絡」を意識していたように、対外戦争に向けて国内の不平分子をある程度懐柔することが、新国家建設の一面であったとも考えられるのではないだろうか。

## 第四章 対外戦争と「国民」

### 第一節 西南戦争の記憶

第三章までは、対外戦争を経る前の日本の様子について触れてきたが、では、対外戦争の最中の日本と「国民」の概念は、どのようなものであったのだろうか。本節では、佐藤愛の「俗謡・西郷伝説・日清戦争―泉鏡花「予備兵」覚え書」を参考に、日清戦争期の日本の様子について触れていく。

佐藤はまず、明治十年八月ごろ、西南戦争において西郷軍の旗色が悪くなり、西郷の居所がわからなくなった直後から、いわゆる西郷星の噂が広まっていたことを取り上げている。西南戦争を契機に急形成されていた新聞というジャーナリズムは、この風説を「妄説」であるという見解を示しながらも、各地で起こる西郷星の話題を絶えず取り上げている。後に西郷星の正体が火星であったことが明らかになると、この騒ぎは一旦沈静化するが、「西郷生存説」や「ロシア皇太子に従い帰国する」などと形を変え、西郷の新たな都市伝説を生み出すことになった。佐藤は、ごく短い期間であったとはいえ、日本の夜空を見慣れない不気味なものにした西郷星は、明治の庶民に強烈な印象をもたらしたことは間違いない。太古から吉凶や異変を空で占ってきた民衆の習慣が、「文明開化」の号令のみで消滅するものではなかったと述べている。(佐藤・二〇〇〇・一五―一六)

戻り且は我祖宗の御制に背き奉り浅間しき次第なりき

この中では、軍隊が徴兵制から志願制、そして武士という一部の人々だけの世襲制へと移っていったことが、「我祖宗」に背くものとして批判されている。(前掲・五) しかしここでも、あくまで兵を募る制度して武士というあり方が低く見られ、決して武士的な価値観が否定されていない点に齋藤は注目している。この勅諭の中で説かれる軍人としての心得は、前述の「兵家德行」で見られたものがさらに強調され、決して武士的な価値観と矛盾するものではないとしている。さらに齋藤は、同勅諭の中で特に重視される「忠節」を説いた部分を引用している。

世論に惑はず政治に拘らず只々一途に己か本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも軽しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くるなかれ

齋藤は、「抜刀隊」で歌われる「忠義のために死する身」という言葉は、この「忠節」の項を一言で象徴するものとして捉えている。警視抜刀隊を含めた、実際に西南戦争に携わった軍隊を、国家の一機関として位置付けるという目的を持った「軍人勅諭」と同じく、「抜刀隊」という作品もまた、戦争中の抜刀隊の心理を改めて表現しなおすことで、明治十五年のコンテクストの中に嵌め込み、当時の社会的・思想的状況を反映していると齋藤は述べている。さらに、先述した軍の天皇に対する忠誠心の広まりを、「抜刀隊」はその題材と内容において、それを忠実に反映していると主張する。(前掲・五〜六)

さらに齋藤は、「軍人勅諭」の基となった「軍人訓戒」の中から、「今の軍人たる者は縦ひ世襲ならずとも、武士たるに相違なし」という部分を取り上げている。この言葉と、「軍人勅諭」で触れられた、徴兵が本来の「國体」に沿うものだとする考えを合わせ、理念的には国民皆兵であった当時、全国民に武士たれとする志向が存在したことを主張している。(前掲・六〜七) 齋藤によれば、明治における規範となった「武士」は、実際のそれではなく、「精神」や「気概」であった。先述したように、

明治における「武士」はその「忠誠心」のみが抽出され、理想化された状態で広まったものである。その「精神」や「気概」、「忠誠心」は、その向かう先を問われることがなかったために、「官」でありつつも「武士」であるという価値観の両立が可能となった。(前掲・八)

### 第五節 「国民」の意識と愛国心

第三節でも述べたように、「抜刀隊」をはじめとする軍歌が普及した明治十年代の日本では、日清戦争の開戦に向けての準備が進められていた。

しかし、明治初期の日本には、「日本人」というアイデンティティを持つ人はほとんどおらず、人々が帰属意識を向ける先は、それぞれの生まれた藩や都市、あるいは集落であった。外山正一は、そうした人々が戦争の際、「日本人として」戦うために「抜刀隊」を作詩したと考えられる。(辻田・二〇一四・二七〜二八) 外山は『新体詩抄』に「抜刀隊」を掲載するにあたり、前書き風の短い解説を添えている。それを要約すると、西洋における軍歌とは戦争の際に士気や愛国心を励ますものであり、「抜刀隊」はそれらに倣ったものである、という内容になっている。齋藤桂は、軍歌としての「抜刀隊」が「国」のアイデンティティを纏い、愛国心と結びつくためには、敵対国の想定が必要であったと述べている。外山が西南戦争という「内戦」に題材を求められなかった以上、「抜刀隊」による「愛国心の鼓舞」には限界があった。(齋藤・二〇〇七・八〜九) 齋藤は、この限界を超えるためには、「抜刀隊」で描かれた「内戦」を止揚し、「自国」を「他国」との対比の中で意識させる出来事が必要であったとしている。そして、「抜刀隊」が内戦を題材に描いた「愛国心」を、文字通りの愛国心とするためには、それを他国へと「投影」し、その投影に対するかたちで自国のアイデンティティを得る必要があったと述べ、日本にとってその「投影」の機会が、明治二十七年の日清戦争まで訪れなかったとしている。(前掲・九〜一〇)

日清戦争が勃発すると、その初めから西郷隆盛に対する公然の同情が高まり、「抜刀隊」に描かれる「官軍」や「朝敵」といった考え方は消滅した。また、薩長主導の新政府に反感を抱いていた、東北の人々の意

お芋を喰ふ、サツマ芋喰つて、プツプツプー  
 いつちく、たつちく、高崎の、黄色いシャツポの兵隊が、西郷に追  
 はれて、トツテチテー

ここで聴けるのは、逆に官軍側を馬鹿にしたような態度であり、西郷  
 に対する同情があったことが窺える。これらは単なる流行にすぎず、世  
 論よりも世評と呼ぶべきものに近いが、当時の一つのドキュメントとし  
 て有効なものであった。(前掲・二)

齋藤はまた、当時のいわゆる「西郷星」の都市伝説や、子どものじゃ  
 んけんにおいて勝った方が西郷軍、負けた方が官軍とされた事例も取り  
 上げている。当時のこういった反応は、確かに一見正反対ではあるが、  
 決して相容れないものではないとし、それが「抜刀隊」の詩中に表れて  
 いることを述べている。

まず冒頭で「我ハ官軍我敵ハ 天地容れざる朝敵ぞ」と官軍の正当性  
 を主張するも、続けて西郷とその麾下の薩摩軍を「敵の大將たる者ハ  
 古今無双の英雄で 之に従ふ兵ハ 共に慄慄決死の士」と称賛している。  
 また、官軍でありつつも「武士と生れた甲斐もなく 義もなき犬と云ハ  
 る、な 卑怯者となせしられそ」と、武士の誇りを強調している。齋藤  
 はここで、「抜刀隊」の詩は一方で「官」であることを強調しつつ、も  
 う一方で「武士」である相手、そして同じく「武士」である自らを立て  
 るという、二つの価値観の混在を主張している。これについては、作詩  
 者である外山正一が幕臣の家系の出身者であり、武士に同情的であった  
 ことも示唆している。(前掲・二二三)

「抜刀隊」の詩中では「賊」という語が用いられているが、齋藤はこ  
 れを政府と維新以前の武士的な価値観を考える上で重要なものとしてい  
 る。明治初年の戊辰戦争の際、大久保利通は「大坂遷都の建白書」を出  
 し、彼はその中で幕府軍を「巨賊」と表現している。しかし、これは全  
 ての武士を指すものではなく、あくまでも幕府軍に付いた者だけを意味  
 している。この中で大久保は、天皇に対して「数百年来一塊シタル因循  
 ノ腐臭ヲ一新シ、官武ノ別ヲ放棄」することを薦めており、この建白書  
 は、その「一新」のために大坂への遷都を提案したものである。齋藤は

ここで、建白書の内容よりも、大久保が武士をどう扱うかという具体的  
 な提案をしたことを重視している。すなわち、制度としての「武士」を  
 廃止する必要性を訴えつつも、それを低く扱うのではなく、「官」と一  
 体化すべきことを主張したことである。これには、大久保に公武合体を  
 目指した時期があったことの関係性を示唆しつつ、明治維新という転換  
 期において、武士そのものを否定しなかった点を齋藤は重要視している。  
 (前掲・三三四)

齋藤によれば、近代化というプロセスは、「維新」という言葉のため  
 にまったく新しい要素の導入という側面が強調されるが、しかし、革  
 新に拘ることによって過去を否定することになれば、近代国家が有するべき  
 「歴史」までも否定することになりかねない。新政府は、前近代の「武  
 士」を社会的制度ではなく、道徳的な規範として温存し、精神化するこ  
 とによって、こうしたジレンマを解決しようとしたのである。(齋藤・  
 二〇一三・二五二二)

西南戦争の翌年、明治十一年の西周による軍将校に対する演説「兵家  
 德行」の中では、「徵兵ナリト雖ドモ其隊長ヲ敬愛シ」などとあるように、  
 軍隊内での上下関係や規律の重要さを説くと同時に、「武門軍人ニ在リ  
 テハ前ニモ云ヒシ軍秩ヲ重ンジ、御命法ヲ宗トスルモノカラ、自然カノ  
 維新以前鎌倉以降覇府ノ制度ト同ジキ所アリ」と述べられている。(齋藤・  
 二〇〇七・四) 齋藤はここで、徵兵と武士の姿を重ね、その忠誠心を天  
 皇に対するものに置き換えることで、軍隊にそれを積極的に奨励してお  
 り、「抜刀隊」にみられる二つの価値観の両立と合致することを主張し  
 ている。(前掲・四四五)

齋藤は続いて、明治十五年に出された「軍人勅諭」を取り上げ、ここ  
 で改めて徵兵制の意味付けがなされ、武士という制度が否定されている  
 ことに着目している。

古の徵兵はいつとなく壮平の姿にvari遂に武士となり兵馬の権は一  
 向に其武士どもの棟梁たる者に歸し世の乱と共に政治の大權も亦其  
 手に落ち凡七百年の間武家の政治とはなりぬ世の様の移り換りて斯  
 なるは人力もて挽回すへきにあらずとはいひなから且は我國体に

## 近代日本における軍歌「抜刀隊」の役割と各種メディアの動きについて

欧州ノ発音ニ模擬シ曲譜ヲ製作シ以テ軍歌トナシ之ヲ兵学ノ一部ニ採用セラレンコトヲ上申セリキ是レ我邦軍歌始行ノ紀元ナリ

文中の「古歌」が何であったのか不明であるが、明治十八年に軍歌作製の動きがあり、それが実現したことを伝えている。同緒言は更に「軍歌を在京各隊の喇叭長以下若干名を選抜して、軍樂其本隊に通学させ、漸次各隊に伝習させた。これが非常に好評を博し、一年以内に軍歌が全国の各隊は勿論、小中学校の生徒にまで普及する盛況ぶりであった」とを記している。(前掲・一三八―一三九)

このように、明治十九年には軍隊や学校において軍歌が流行し、その教育・普及のために軍歌の豆本が出版されたと考えられる。明治十九年は、前年十二月に初代文部大臣に就任した森有礼が学校制度改革に乗り出し、三月・四月に諸学校令を公布した年である。森は富国強兵の教育政策を推進し、師範学校では「兵式体操」「軍隊式の教育」「従順」「友情」「威儀」の三氣質が重んじられ、小学校でも兵式体操や行軍が盛んに行われた。こうした教育方針も軍歌の普及に大きく関わっていたと考えられる。(前掲・一三九―一四〇)「抜刀隊」のモデルになったとされる「軽騎隊進撃の歌」は、日本の軍歌に影響を与えただけでなく、日本の軍歌そのものとしても採用された。また、「運動唱歌法」という、小学校の生徒の隊列行進や、「行軍」または「遠足運動会」と称した遠方への行進時に「運動歌」として用いられるなど、当時の学校教育にも影響を残している。(前掲・一六二)

森の「国家富強ハ忠君愛国ノ精神旺盛スルヨリ来ル」という国体重視の考えに象徴されるように、当時の軍歌には忠義の軍人を叱咤激励する内容のものが多かった。(前掲・一四〇)「抜刀隊」の詩に目を向けてみると、全八十四行の詩の中で実に三十一回ほど直接間接に「戦死」への言及がなされている。警視抜刀隊は内戦に赴く決死隊で、その使命は「君のためなり 国のため」であり、「たとえ屍は朽ちるとも 名ハ芳しく後の世に 永く伝えて残るらん」として鼓舞され、「戦死」はあくまでも新国家建設のための人柱として永遠に信仰される行為とされた。一方で、君(天皇)と国家のためという大義の下では、個人の苦悩や悲痛な

感情は無視されていたのである。(山本・一九八五・一五三)こうした「国のために死ぬ」ことを強調した表現はテニソンの詩の訳詩には見られず、外山は緊迫した対清関係を念頭に置き、現実的な叱咤の意を込めて「抜刀隊」を創作したと考えられる。(中山・二〇〇七・一六二)日清戦争の勃発に至る過程において、軍歌は年々盛んになり、開戦後は実戦状況に内容に盛り込んだ歌詞が増えてきた。また、作詞作曲者の顔ぶれも変わってくるため、戦争以前とは異なる特徴の軍歌が出現することとなる。(前掲・一四〇)

#### 第四節 精神化される武士像

明治十年代に流行した軍歌の中でも、「抜刀隊」の特徴が、士族出身者の活躍を歌う内容にあることは、第一章で述べた。しかしこれは、武士の存在を否定する明治新政府の方針と矛盾するものであるとも考えられる。

齋藤桂はこうした問題について、「抜刀隊」の中に二つの価値観が混在することを主張している。(齋藤・二〇〇七・二一三)第一章で述べた西南戦争、田原坂の戦いにおける対決の構図を念頭に置きつつ、本節では齋藤の論文を参考に、明治時代における武士像について触れていきたい。

齋藤はまず、藤澤衛彦の『明治流行歌史』(一九二九年)の中から、西南戦争期の流行歌を取り上げている。

##### 【西郷伏誅斬首の唄】

西郷隆盛ヤ鯛か雑魚か、たい(鯛・隊)に追はれて逃げかねた。

西郷隆盛ヤ枕がいらぬ、いらぬ筈だよ首がない。

この歌だけを見ると、当時の世間は西郷隆盛を低く見ていたようにも取れるが、逆の反応も多かったようだ。齋藤は藤澤の著書から、次のような歌も取り上げている。

いつちく、たつちく、竹橋の、赤いシャツポの兵隊さん、何喰ふ、

「字廃止」を講じて「仮名の会」へと参加し、その翌年には「羅馬字会」の創設に携わっている。外山はこの「漢字廃止」の根拠として、ローマ・カトリック教会が聖書をラテン語に限定し、それによって知の専有を行ってきた歴史を挙げており、漢字を理解できない者のためにも仮名文字、ひいてはローマ字を用いることを主張したのである。漢字の使用は、それを理解できない者から知を収奪することに等しかったのだ。外山は漢語のエクリチュールを脱し、同時に欧米の知識・文化を受け入れるために都合の良い文字、すなわちメディアであるローマ字の導入を必要としたのである。外山にとつて重要だったのは、近代国家に相応しい知の解放、すなわち欧米の知識との混交化であった。その彼にとつて言語や文字は「方便」であり、新しい思想や知識を伝達・交換するための透明なメディアであった。(前掲・一三三)

## 第二節 新体詩からみえる思想

前節で述べた言葉の理解に基づき、外山は井上哲次郎・矢田部良吉とともに『新体詩抄』(明治十五年)を出版する。ここに収録されている新体詩の大半は、シエイクスピアなどの英詩を和訳して生まれたもので、やはり漢字＝漢詩からの脱却を図る内容となっている。軍歌「抜刀隊」もこの中に収録された外山の創作詩の一つであり、こうした新体詩には、従来の和歌や川柳、漢詩などでは不可能な「感動」や「思想」が表出される。(前掲・一三三～一三四) 外山はこれについて直接の言及はしていないが、清水がここで重要視しているのは、言葉というメディアの透明化である。この場合の外山にとつて、「感情」と「思想」との間に大差はなく、また作品の巧拙も問題ではなかった。言葉の自然化とは、伝達過程から夾雑物を排し、また言葉をそれとして意識させないことを意味している。これが完成するのは言文一致運動を経た後のことであり、言文一致体が標準語、すなわち国家語として制定されるとき、言葉は限りなく透明なもの化していった。外山らの新体詩はその過程の中にあり、充分な役割を果たしたわけではなかった。外山はその点に自覚的であったからこそ、朗読による感情の喚起を、透明化のための補充的要素として付加させたと考えられ、それは外山が自らの作品に「朗読体」もしく

は「口演体新体詩」と名付けていることから窺える。朗読は観客を参加へと誘い、その情動に直接働きかけて「感動」へと巻き込み、作詩者と観客との距離を消し去って透明化するための仕掛けである。これは、前節で述べた「萬歳」が、情動喚起によって選挙民(国民)と非選挙民(客分)の距離をなくすのと同じ仕組みである。(前掲・一三四～一三五)

## 第三節 軍歌の普及と教育

前節までは、「国民」創生のための外山正一(一)の思想についてふれてきた。続いては、「抜刀隊」をはじめとする軍歌が、新国家の創生のために果たした役割をみていきたい。

明治十年代の日本では、清国との関係悪化によって軍備拡充の動きが進んでいた。この動きと並行して軍楽も整備され、楽隊の指導・養成や礼式曲の制定が行われた。明治十八年には軍歌が兵学の一つとして加えられることとなる。更に、陸軍ではフランス式、海軍ではイギリス式が用いられていた従来の喇叭譜が、国産の「陸海軍喇叭譜」に統一・制定された。その第一号である「君が代」をはじめ、これら「礼式の部」の喇叭譜は短めの曲だが、その精神は歌詞にあることが強調された。(中山・二〇〇七・一三七)

明治十九年四月に出版された河井源蔵編『軍歌』には、明治軍歌の嚆矢となった「抜刀隊」をはじめ十三編の軍歌が掲載され、同年、これを原案とした日本初の軍歌集とされる豆本が、「軍歌」あるいは「軍歌集」のタイトルで、全国の主要都市で相次いで出版された。山口県士族で旧陸軍士官の藤井竹一が著者兼発行者となり、明治二十二年九月に出版された『軍歌集』の緒言で、藤井は次のように述べている。

我陸軍ニ於テ欧州流ノ軍楽ヲ採用セシハ既ニ久シ蓋シ明治四年十二月八日三兵喇叭ヲ兵学寮ニ管理セシニ胚胎シ同八年十月二十日軍楽隊概則を頒布セシニ成形シ爾来幾多ノ星霜ヲ経過シ遂ニ今日彼ノ如ク健全トシテ發育セリキ今ヤ陸軍戸山学校ニ軍楽基本隊ヲ置キ専ラ楽手ヲ養成シ斯道ノ振振ヲ計画セリ(中略)十八年六月廿五日陸軍教導団(当時軍楽基本隊ハ該団ノ所管タリ)ニ於テ古歌一二ヲ撰ミ

生住はここで、鹿兒島の女武者が、いわゆる「烈女」「烈婦」の代表格である巴御前と並んで描かれた「西南戦争錦絵」の存在を挙げている。生住はこれを、薩摩女武者が当代の巴御前として描かれ、享受されていたことを知らせる好例であるとしている。そして、「賊徒」とされた西郷軍の諸将の妻や娘たちも、貞操や節義を現した「烈女」「烈婦」として異種百人一首に描かれることとなった。様々な徳目をクローズアップした異種百人一種という読み物が、新政府の推進する国民教化と重なり合った空間の中で享受されていたことが、明治十年代の異種百人一首の盛り上がり背景にあると生住は述べている。(前掲・一三〇―一三五)

続く第三章においては、「抜刀隊」の作詩者である外山正一のメディアについての思想と、「抜刀隊」が新国家建設においてどのような位置づけをなされていたかについて論じていく。

### 第三章 外山正一の思想と明治の道徳観念

#### 第一節 「国民」の創生

明治十年までに連続した士族反乱の終息、その後の自由民権運動の隆盛と挫折、そして明治二十二年の憲法発布を前後として、新国家としての日本は制度的な安定をみた。同時に、新国家を構成する「国民」の創生が新たな課題とされるようになる。この「国民」の創生過程においては、文学などの文化運動が様々なメディアを通して大きく関与していた。(清水・二〇〇三・一三〇)

「抜刀隊」の作詞者である外山正一も芸術に大きな関心を示していたが、彼にとつての芸術とは単に美的なものではなく、あくまでも「国民」を統制・啓蒙するための手段であり、プロパガンダのためのメディアであった。(前掲・一三〇) 本節では、外山のメディアと芸術についての思想と、彼が「国民」の創生のために果たした役割について、清水瑞久の「外山正一にみるメディアと芸術―透明化されるメディアと国民の創生」を参考に触れていく。

外山正一のメディアに対する考え方においては、明治の新しい思想を

プロパガンダする装置としてのメディアは、可能な限り透明である必要があった。この場合の透明であるとは、二重の意味を持つている。一つは、思想の送り手と受け手(国民)との間に、違和感や批判などを生み出しかねない内容的な夾雑物が介在しないこと、もう一つは、そのメディアが自然なものとなることで、メディアはそれ自体としては自覚されなくなることである。プロパガンダは、それがプロパガンダであると認識されないとき、もつとも効率的にその機能を果たすため、外山はメディアを透明なものとして作り上げることが強く目指していたと考えられる。(前掲・一三〇―一三二)

では、外山はどのようにして「国民」の創生を推進したのか。前述の観点から考えるとき、清水はもつとも象徴的な事例として、「萬歳三唱」の導入を挙げている。明治二十二年の憲法発布の際、制限選挙の実施によって、選挙権を持つ「国民」と選挙権を持たない「客分」の分断もたらされた。外山はこの制度的な分断を意識上でなくし、天皇を中心とした国民の一体化のため、憲法発布の祝賀式において自ら萬歳三唱の音頭を取った。ここでの外山のねらいは、身振りと大声を促し、直接身体へと働きかけることによって、「客分」意識を持つ個人々々を「国民」の祝祭的ドラマへと巻き込むことであり、この中では、メディアとしての「萬歳」は自然化されていたのである。(前掲・一三二―一三三)

また、外山は人民を穩健に制御することが国家の進化に繋がると考えており、これは政府と人民の歴史の力学を見てのことであった。欧米における革命運動の原因が、人民に対する政府の圧政・干渉であったことを鑑みた外山は、平和的に人民を籠絡することに関心を持っていた。外山はまた、自由民権運動が始まって間もないころに国会の早期開設を訴えているが、これはあくまでも政府の立場からの主張であり、民権の樹立に加担してのものではなかった。しかし、時期尚早論の声が大きい中、国会の早期開設を政府内から主張したことは、人民の籠絡が目的であったにせよ、外山の特異性を表している。すなわち、外山の人民陶冶に向けた問題意識は、早い段階から明確であったといえる。(前掲・一三三)

また「国民」の文化統制に主眼を置いていた外山は、政府の思想を効率的に宣伝すべく、言葉の改良にも取り組んだ。彼は明治十七年、「漢



図一：大蘇芳年「鹿児嶋婦女乱暴之図」  
(岩切友里子「芳年」p.106～107、2014年、平凡社)

実在性を兼ね備えて画中に出現した。疑いの目が向けられつつも、薩摩女隊は当時の新聞紙面上で報じられていたことから、決して荒唐無稽な存在ではなかったことがわかる。(前掲・三〇五)

続いて生住は、梅堂国政の「鹿児島新聞之内」田原坂進撃之図」を取り上げている。「西南戦争錦絵」の中でも特に有名なこの絵には、政府軍の野津鎮雄少将と西郷軍の桐野利秋の一騎打ちが描かれている。桐野が田原坂の戦いに参加したという記録はないに関わらず、野津・桐野の一

騎打ちを描いた絵は複数確認されていることから、生住はここでも絵師たちの想像力の源泉を新聞記事に見出し、次のような記事を引用している。

…官賊両軍が入り乱れて相戦ふ最中に彼の賊徒中にて剛勇の名を得たる桐野利秋ハ汗馬に鞭うち驀地に馳せ来り官兵を指揮せらる、野津少将に近づきスハヤと云ふ間に已に其の肩先へ斬り付けたり少将ハ左程の深手にはあらざれども…(四月七日付「朝野新聞」)

野津・桐野が幾度も切り結ぶような一騎打ちはなかったが、両者が直に接触したことが報じられていたことから、絵師たちは決して「嘘」を描き出したのではなく、新聞記事という跳び板を蹴って己の想像力を跳躍させたと生住は述べている。(前掲・五〇七) その想像力の着地点は過去に紡がれた様々な戦記であったと生住は考えており、武田信玄と上

杉謙信の川中島の一騎打ちのように、戦記の常套であった一騎打ちが、野津・桐野の一騎打ちの下敷きになったと推論している。(前掲・七〇八)

### 第三節 異種百人一首の流行

生住は続いて、明治十年代の異種百人一首の流行に着目している。これらは、同時代の著名人を集め、上部に略歴を記し、下部に人物の肖像を描いて、その余白に和歌や漢詩などを書き付けた読み物である。この出版界の盛り上がり背景に、明治十年から十一年の間に刊行された「西南戦争錦絵」と、西南戦争に取材した実録的読み物(生住はこれを「西南戦争実録」と記している)の存在があったと生住は推測している。(前掲・一一) 図二・三は明治十四年に刊行された安井乙熊編『明治英名百人首』の中に収録されている絵の一部である。



図二：安井乙熊編『明治英名百人首』(明治十四年)より、三条実美・西郷隆盛の図(山本武利・有山輝雄監修『新聞記者論I』p.380～381、1995年、ゆまに書房)



図三：安井乙熊編『明治英名百人首』(明治十四年)より、西郷従道・桐野利秋の図(山本武利・有山輝雄監修『新聞記者論I』p.398～399、1995年、ゆまに書房)

こうした異種百人一種の中には、錦絵や実録を通して有名になった、士族反乱に関係する人物たちが官賊入り混じって記載されている。さらに特徴的なのが、西南戦争における「賊徒」以外にも、吉原の花魁までもが政府高官たちと等しく「英名」の人として描かれている点であると、生住は述べている。その理由は、両者が「忠・考・義・貞」といった徳目を備えた人物として、等しく位置づけられたためとしている。(前掲・一二～一三)

ている。生住はこれを、政府の検閲を通過させるための政治的・商業的な配慮であったと推定している。(前掲・七〇九)

生住はさらに、「土族反乱実録」は作り手側の意図とは別のところで、人々の土族反乱に対する認識を画一化させる可能性のあったことを推定している。『明九西国暴動録』は、先述したように「賊徒」を「狂人」や「白痴漢」と呼び習わし、相互理解が不可能な者として定位するその語り口から、読者と「賊徒」との間に明確な線引きを行うものであったと生住は捉えている。生住は、このような線引きがあったからこそ、人々は「賊徒」とは違う「国民」の一人としての自分を強く認識し、ひいては結束すべきところの「国家」を想像したに違いないと述べている。また、土族反乱を様々に解釈する余地が残っていた新聞に対し、『明九西国暴動録』は矛盾も衝突もない語りの枠組みの中で、土族反乱という事件を構成しており、新聞紙面上において許容されていた自由な解釈を許していなかった。その分だけ過剰に、『明九西国暴動録』が読者の土族反乱に対する認識を画一化させつつ、国民統合を推し進めた可能性を生住は推定している。(前掲・一〇)

同時に、政府にとって都合の悪い内容を書けば、その「実録」は検閲を通過できないばかりか、おそらくそれを出版した書肆は弾圧を受けていたと考えられるだろう。土族反乱は当時の政府にとって非常にデリケートな国内問題であり、出版業界もまた、単に一攫千金を狙うことだけは考えられなかったであろう。

## 第二節 新聞錦絵の登場

第一節では、新聞報道を典拠とした「土族反乱実録」に焦点を当て、それらが国民統合のために果たした役割について論じてきた。第二節では、同じく新聞報道の副産物ともいえる新聞錦絵を取り上げ、当時の人々がどのように西南戦争を捉え、描いていったかについて考察していきたい。

明治十年二月に西南戦争が勃発すると、東京の新聞各社はこぞ記者を報道合戦に投入した。特派員の多くは、征討大本営が設置された京都で戦報を待っていたが、『東京日日新聞』の福地源一郎、『郵便報知新

聞』の犬養毅などは自ら戦地に赴いて取材した。彼らの現地取材が可能とした、速報性と正確性を兼ね備えた記事は読者の好評を獲得し、新聞業界でも次第に重視されるようになる。(生住・二〇一四・一)

このように近代ジャーナリズムが切り開かれる一方で、「客観報道」を度外視したかのような、西南戦争関連の読み物や錦絵が巷に溢れた。生住は、戦地に赴くことなく作画を行った絵師たちの「想像力」の源泉は、「西南戦争錦絵」の場合、主に新聞記事であったと考えている。当時の新聞には視覚情報が欠落しており、それを提供する「西南戦争錦絵」の刊行に多くの版元が乗り出すも、こうした錦絵は当初はあまり売れなかった。しかし、明治十年四月に入ると売り上げが急増することとなる。生住はその理由として、戦争の激化と同時に、先述した福地・犬養らの戦争報道の成功によつて、人々の西南戦争に対する関心が高まったことを推定している。錦絵が伝える迫力や臨場感は、福地・犬養らの新聞報道と相俟つて、人々を釘付けにしたと考えられる。(前掲・一〇三)

さらに版元は、人々が美人や力士など、江戸時代以来の錦絵の好題材を好んでいることを知ると、図一のような薩摩の女隊図などが数多く摺られることとなる。実際には薩摩の女性たちが隊を組んで戦闘に参加したという記録は残っていないが、生住は次のような新聞記事を引用している。

我兵卒の話に賊軍の鯨声を発する時往々女の声を聞く又望遠鏡にて望み見るに婦女子の薙刀を携へ駢馳奔走するを見ると甚だ信じ難き風説なり(三月二十九日付『郵便報知新聞』)

此ごろ諸新聞に薩州より女兵が幾千人とか熊本戦地へ押し出したりと記したるハ如何しく思ひ居たるに万ざら無き咄しにも非ざるべしと云ふ説あり(四月七日付『東京日日新聞』)

このように女隊の存在は報道されていたが、同時に疑いの目も向けられていたのである。しかし、こうした記事を基に「西南戦争錦絵」として仕立て上げられたことにより、フィクションな存在の薩摩女隊は、

している。(尼ヶ崎・二〇一・五六)しかし、第二節でも述べたように、日本刀を得物とする旧士族(警視抜刀隊)の活躍を称えることは、新政府が推進してきた近代化政策と矛盾することでもあった。この点に関しても、第三章で詳しく取り上げることとし、「抜刀隊」の役割について考察していきたい。

次の章では、日本で相次いだ士族反乱がどのように伝えられ、人々がその情報をどのように受容していたかについて触れていきたい。

## 第二章 伝えられる士族反乱

### 第一節 士族反乱実録の影響

明治九年の熊本・神風連の乱を皮切りに各地で頻発した士族反乱に際し、その動向を連日報じた新聞が飛ぶように売れた。(生住・二〇〇九・一)本章では、生住昌大の論文を参考に、当時の様々な出版物が人々に与えた影響について考察していきたい。

士族反乱の動向を報じた新聞が売れるのと同時に、その記事から情報を得て、反乱を小説風に綴った読み物が当時大量に消費されていた。生住はそうした読み物を「士族反乱実録」と仮称し、これらが消費されていた事実が忘れ去られようとしていることを指摘している。この理由について生住は、「士族反乱実録」が誤報や風聞の入り混じっていた新聞記事を典拠としていたために、歴史史料としての信憑性が低い点を挙げているが、同時にそれらが「国民国家」形成の問題に深く関わっていた可能性において、貴重な資料であることを示唆している。生住によれば、「士族反乱実録」はいわば新聞報道の語り直しを行っていたのであり、そのありようは実に様々であった。中には、新聞メディア以上に人々の士族反乱に対する認識を規定・教化し、国民統合を推し進める役割を担っていたかのような「士族反乱実録」も見受けられると述べ、その例として栗原素行編『明九西国暴動録』を挙げている。(前掲・一〇二)

『明九西国暴動録』は、「官軍鎮定ノ偉功ヲ表スル」という刊行目的が表明記されており、反乱を起こした士族とは絶対的な距離を置くことが表

明されている。生住は、その「緒言」の冒頭を引用している。

文明ノ世ヲ妬ミテ圧政ノ旧弊ヲ慕フハ、甚ダ人情ニ悖レルコト論ヲ待タズ、況ヤ九州ノ一辺ナル彈丸黒子ノ地ニ突起シ、無名不正ノ兵ヲ以テ我聖代ヲ動カサントスルハ、卵ヲ以テ石ヲ压スニ齊シク、狂人ナラズンバ乃チ是レ白痴漢ナリ、……(第一号、諸一才)

反乱を起こした士族、すなわち「賊徒」を「狂人」や「白痴漢」という表現で非難している。また、『明九西国暴動録』においては、士族反乱によって「賊徒」が「影モナク」滅んだことにより、結果として熊本などの「開化」を促進したという旨の総括がなされており、以上のような表現は新聞紙面上にも表れていた。『明九西国暴動録』の「緒言」においても、当時の新聞や雑誌などを参考に編まれたことが明記されている。(前掲・二一三)

『明九西国暴動録』では、廢刀令・秩禄処分・断髮令に士族反乱勃発の原因を見出す、当時の一般的な見解を支持している。しかし、一部の新聞記事においては、全国に愛国心を抱く人々が少なく、ともすると政府が信用されていなかったことを指摘している。また、士族反乱が勃発しても、そのことを憂う者は少なく、逆に喜ぶ者さえ存在したという現状こそ、反乱を誘発した原因であるという見方も存在していた。(前掲・四)『明九西国暴動録』においては、政府を批判する内容の新聞記事を無視し、さらに、政府の失態とも言うべき事実を記す際には、政府側が不利にならないような語り直しが行われていたのである。生住はこの背後に、積極的な政治的意図の存在を見つづも、『明九西国暴動録』が政治色を帯びるに至った経緯については、「士族反乱実録」そのものの性格を捉える必要性を主張している。(前掲・六〇七)

生住は、明治七年刊行の『佐賀電信録』(名山閣)の成功に触発された出版書肆が、明治九年の士族反乱に際し、一攫千金を狙って「士族反乱実録」の刊行に乗り出した事例を取り上げている。生住によれば、「士族反乱実録」は際もの的な性格を多分に有しており、先述したような新聞記事の取捨選択を、そのまま編者の政治的意図とするのは危ういとし

抜刀隊ノ研込實ニ本日ヲ以テ始ト爲ス（『卷八・田原坂戦記』十四（十五））

翌日開始された横平山の攻防戦でも抜刀隊が活躍し、山頂を奪うことに成功した。大きな損害を受けつつも戦果を上げた警視抜刀隊であったが、政府側は既に兵力の不足に陥っていた。当時の徴兵制度では免役適業者が多く、また後備兵も不十分であったため、政府内では、戦力が不安視され訓練に手間のかかる徴兵ではなく、即戦力となる士族を募集すべきという声が挙がる。これは徴兵令と矛盾する措置であり、懸念を示す者も多かったが、結局、士族を「巡查」として募集し、補充要員とすることが決定する。（小川原・二〇〇七・一一九～一二〇）

抜刀隊の補充要員として募集された士族巡查の中には、旧会津藩などの出身者が多数参加していた。彼らがかつての戊辰戦争で「朝敵」となった武士たちであり、維新後は苦しい生活を余儀なくされていた。（前掲・一二一）西南戦争の時、『郵便報知新聞』の記者として田原坂に派遣された犬養毅は、元会津藩士の某巡查が、「戊辰の復讐」と叫びながら奮闘したことを記事に書いている。苦境を生き抜いた元会津藩士が新政府の巡查となり、朝敵となった薩摩の士族に対し、今度は官軍として復讐した、という構図である。犬養の記事が事実かどうか定かではないが、会津人が命を惜しまぬ活躍をしたのは事実であり、警視隊の福島県出身者の比率は十パーセント弱であったが、戦死者は二十四パーセントを占めていた。（尼ヶ崎・二〇一一・八九～九二）

最終的に田原坂の戦いの勝敗を決したのは、ドイツ式の火力主義であった。政府軍は谷を挟んだ横平山に砲兵陣地を築いて、三月二十日の総攻撃ではそこから猛烈な砲撃を行い、西郷軍の戦闘力を弱体化させた。そこに政府軍の大兵力が突撃して西郷軍は敗走し、田原坂は陥落した。この戦いの勝敗を分ける決定打とはならなかったが、国民の記憶に残ったのは、薩摩と新政府の旧武士とが、日本刀で激しく斬りあう抜刀隊のイメージであった。（前掲・八十九）田原坂の陥落後、兵力で勝る政府軍が優位に立ち、西郷軍は九州各地を転戦するも、四月に本拠地である鹿児島を占領され、敗色は濃厚となった。西郷軍は九月、鹿児島市内に

突入し、城山を占拠して政府軍と対峙する。九月二十四日早暁、西郷軍と政府軍との最後の戦闘が開始され、西郷の自刃によって西南戦争は終結した。（坂本・一九九九・二〇九）

### 第三節 日本初の洋式軍歌

西南戦争の終結から数年後、田原坂で活躍した警視抜刀隊に題材を得て、軍歌「抜刀隊」は誕生した。これは、東大教授の外山正一が詩集『新体詩抄』（明治十五年）に掲載した詩に、フランス人音楽家のシャルル・ルルーが作曲して成立したもので、日本初の洋式軍歌となった。（齋藤・二〇一三・二四）この歌詞は、各節ともに七五調の十四行からなっており、終わりの四行が六節共通の歌詞として繰り返されている。（小村・二〇一一・五〇）「抜刀隊」は明治十八年、東京の鹿鳴館で陸軍軍楽隊によって初演され、翌年には軍楽として採用されている。（中山・二〇〇七・一五七）

幕臣の子として生まれた外山正一（一八四八～一九〇〇）は、幕末に英国、維新後にはアメリカに留学し、明治九年に帰国した。その後開成学校教授から東大教授となり、高等教育に携わる一方で、新体詩などの多様な文化活動を推進した。（齊藤・倉田・谷川・二〇〇六・三四二）彼の思想については、第三章で取り上げていく。

外山が「抜刀隊」を掲載・出版した『新体詩抄』には、西洋詩の訳詩も掲載されていた。その中の一つ、英国の詩人アルフレッド・テニソンが、クリミア戦争に題材を得て作詩した「軽騎隊進撃の歌」は、その文法から「抜刀隊」を作詩する際に参照されたと考えられている。（辻田・二〇一四・三二）外山が七五調に訳した詩の中には、「右を望めば大筒ぞ前も左も又筒ぞ」「弾丸雨飛の間にも」など、「抜刀隊」との類似表現が多く見られる。（中山・二〇〇七・一六一～一六二）

「抜刀隊」の詩の中では、敵である西郷軍を「古今無双の英雄」「剽悍決死の士」という表現で称賛し、また、「維新のかた廃れたる日本刀の今更に」「又世に出づる身の誉」と、日本刀に対する強い思い入れを表現している。そして、「敵の亡ぶる夫迄は（中略）死ぬる覚悟で進むべし」と、「進む」ことへの意気込みと「死ぬ」ことへの執着を強調



写真一：田原坂・三の坂付近（筆者撮影）



写真二：田原坂・頂上付近（筆者撮影）

し、西郷本人の参加を確認すると本格的な討伐を決意し、京阪に天皇の行在所と征討総督本営がそれぞれ設置された。（坂本・一九九二〇六～二〇八）

二月二十二日、西郷軍は熊本鎮台の籠もる熊本城を攻囲するが、鎮台司令官谷干城の率いる政府軍の抵抗に苦戦する。（畠中・一九八七・三二～三三）やがて大阪を出発した政府軍の主力部隊が博多に上陸し、熊本に向けて南下を始めると、西郷軍は熊本から約二十キロの道中にある田原坂に立て籠もった。田原坂は、福岡から熊本を目指す政府軍が避けては通れず、砲兵が大砲を引いて通行可能な唯一の経路であった。坂道は全長約二キロの緩やかな勾配だが、両側が断崖になった切り通しの道で、その上曲がりくねった見通しの悪い縦貫道であった。ここを先に制した西郷軍は、坂の各所に塁を設け、その前には穴を掘って逆茂木を仕掛けた。さらに道の両側の崖の上にも塁壁を築き、断崖にも横穴を掘って一斉射撃を浴びせる態勢を取った。この銃撃と抜刀突撃によって、政府軍は苦戦を強いられることとなる。（前掲・三八～四二）

筆者も現地を訪ね、実際に田原坂を登ってみたが、凹型の道の脇には木々が鬱蒼と茂り、ただでさえ悪い先の見通しをさらに困難にしていた。急な坂道を登りつつ、伏兵や突然の猛射に備えなければならなかった政府軍の兵士たちへの心理的な影響は、計り知れないものがあったことだ

ろう。

## 第二節 田原坂の警視隊

三月四日、政府軍は田原坂への総攻撃を開始し、西郷軍の第一塁を突破するも、坂道にさしかかると高所からの猛射を受けて苦戦を強いられる。（小川原・二〇〇七・一一四）西郷軍は火力の劣勢を補う意味もあって白兵戦を重視していたが、政府軍では逆に火力が重視され、また徴募兵の訓練の未熟さもあって西郷軍の突撃に圧倒されていた。（浅川・二〇〇一・二一九）政府側ではこの戦況を打開するため、当初は警備や輸送を担当していた警視隊が、戦闘に参加することが提案され、百名の精鋭が「抜刀隊」として編成された。（小川原・二〇〇七・一一九）陸軍の指揮を執っていた山県有朋は、当初はこの方針に消極的な態度を取っていた。それは、陸軍が自力で反乱軍を鎮圧することができず、警察の力を借りるとなれば、陸軍の体面に係わるということもあった。そしてそれ以上に、刀を得物とする旧士族が前線に立つということは、山県自身が推進してきた徴兵令や廃刀令などの近代化政策と矛盾するものであった。（尼ヶ崎・二〇一一・八八）「抜刀隊」の主力を形成していたのは、鹿児島島の郷士階級出身の巡査であった。郷士とは旧藩時代における下級武士であり、上級武士である城下士からは「郷の者」と呼ばれて差別され、維新後も両者の溝は埋まることがなかった。戦場における彼らの奮戦の背景には、自分たちを見下してきた城下士への恨みを晴らしたい、という心理が潜んでいたのではないかと考えられている。彼らは三月十四日の早朝から戦線に加わり、西郷軍の堡塁に白刃による突撃を敢行した。（小川原・二〇〇七・一一九～一二〇）

後に陸軍参謀本部で編纂された『征西戦記稿』には、抜刀隊の活躍が次のように記述されている。

我カ抜刀隊ハ川畑上田園田三警部各、自ラ刀ヲ揮ヒ其衆ヲ分率シ（中略）賊ノ中央ノ壘ニ逼リ三面一齊ニ衝突シ縦横亂撃立トコロニ數十賊ヲ斬ル餘賊壘ヲ棄テ走ル乃チ奪フテ之ニ據ル此壘ヤ臺兵十數日ノ攻撃ヲ費ス所是日一挙之ヲ陥ル抜刀隊ノ功多キニ居ル世ニ所謂

## はじめに

日本の明治時代に興味を持って大学に入学した私は、昔からその時代を取り上げた本や小説を読み漁ってきた。そうした趣味の時間の中で私は、「抜刀隊」という語に出会ったのである。明治十年の西南戦争の最中、かつての戊辰戦争で「朝敵」となった武士たちが今度は「官軍」となり、維新最大の英雄である西郷隆盛と、日本最強と言われた薩摩の武士たちに挑んでいくという劇的な構図に、私の好奇心は強く引きつけられた。そして、その戦いを題材とした軍歌「抜刀隊」の存在を知り、卒業研究のテーマとすることを決めた。

本論文では、明治維新後の新国家建設期の日本において、軍歌「抜刀隊」が果たした役割を明らかにし、同時代に発達した様々な「メディア」の動向について考察していきたい。

## 第一章 軍歌「抜刀隊」の誕生

## 第一節 西南戦争の勃発

明治六年十月、征韓論の決裂によって西郷隆盛・板垣退助・江藤新平らの征韓派参議が辞職した。(『国史大辞典』) この政変の結果、鹿児島と高知を中心とした反政府勢力が生まれ、全国の士族の反政府気運がこの二大勢力を軸に醸成されていく。不平士族による反政府活動は、前述の政変で下野した前参議・江藤新平を担ぐ佐賀の乱をはじめ、全国で様々な事件や騒乱が引き起こされた。(坂本・一九九九・二〇〇)そして、明治九年に薩刀令が発せられ、金禄公債による秩禄処分が確定すると、熊本、神風連の乱、福岡の秋月の乱、萩の乱と、本格的な士族反乱が頻発することとなった。これらはいずれも少数による蜂起だったうえ、準備や計画の杜撰さから、政府軍によって速やかに鎮圧されていく。明治初期に相次いだ士族反乱の最大にして最後のものとなったのが、鹿児島で勃発した西南戦争であった。(前掲・二〇六)

士族反乱に関しては政治史・社会経済史・人物史などの諸観点より、

正確な史実の追求とその歴史的評価を目指し、多くの成果が蓄積されていると、高野信治は述べている。高野はこうした研究に学びながらも、やや異なった二つの観点を提示しており、一つは武士(士族)像の観点、もう一つは語られ方の観点である。前者に関しては、反乱を起こした士族は言うまでもなく旧武士層であるが、その意味がこれまで十分に検討されてきたとはいえない印象を高野氏は持っている。「政府の士族の特権剥奪政策に対する士族層の不平はくすぶり、それが士族反乱の起因」で、「反乱に共通していたのは、征韓論の断行と武士の特権の回復を要求していたこと」であり、これは結局「反動的性格をもつ運動」という通説的な見方については理解を示しながらも、反乱を起こした士族がその属性に即してどのように認識されていたのか、という視覚は希薄である」と高野は考えている。言い換えれば、反乱を起こした士族が、文字通りの逆賊または地位回復や顕彰などの眼差しが向けられる場合、そこには旧武士・士族という社会的価値意識、いわば近代「武士」像の内在于観察されるとき、「反動的性格」という評価におさまらない見方を想定している。こうした理由から、士族反乱がどのように語り伝えられ、当事者の「語り」も含めた反乱そのものの伝えられ方や、そこに潜む歴史認識を想定した後者の観点が必要になると、高野は述べている。(高野・二〇〇八・三二六)

不平士族たちの「剣」による最大の反抗となった西南戦争の直接の原因は、明治十年一月、政府が、鹿児島、鹿兒島の弾薬庫の大砲・弾薬を県外へと撤去せんと試みたことであった。鹿児島私学校の急進派はこれを受け、私学校幹部・桐野利秋のもとに集結して決起を主張するも、当初、西郷隆盛や穩健派の幹部によって自制が説かれていた。しかし、政府側による西郷の暗殺計画が発覚すると、西郷はじめ穩健派の幹部も武力蜂起を決意し、同年二月十四日には、「政府へ尋問之筋」あるがゆえに、西郷らの「無異議通行」を依頼する通知書が各府県に送られた。西郷には約一万三千人の鹿児島士族が付き従ったほか、旧熊本藩、延岡藩、中津藩、福岡藩など九州各地の不平士族も呼応して参加した。政府はこれに対し、当初は私学校過激派の暴発とみて、西郷が反乱に参加していることに疑念を持ち、西郷を説得することによる事態の収拾を意図していた。しか

# 近代日本における軍歌「抜刀隊」の役割と各種メディアの動きについて

正田 基裕  
(堀田ゼミ)

## 【目次】

はじめに

おわりに

### 第一章 軍歌「抜刀隊」の誕生

参考文献

第一節 西南戦争の勃発

第二節 田原坂の警視隊

第三節 日本初の洋式軍歌

資料

### 第二章 伝えられる士族反乱

第一節 士族反乱実録の影響

第二節 新聞錦絵の登場

第三節 異種百人一首の流行

### 第三章 外山正一 の思想と明治の道徳観念

第一節 「国民」の創生

第二節 新体詩からみえる思想

第三節 軍歌の普及と教育

第四節 精神化される武士像

第五節 「国民」の意識と愛国心

### 第四章 対外戦争と「国民」

第一節 西南戦争の記憶